二〇二五年五月二日

春新樹光浴びて行進鼓笛隊　みきお
神の杜青葉若葉に膨らみぬ　やよい
問安す療養所へと若葉道　む　べ
美術館記念館へと踏青す　わかば
遊ぼうと子らに追はるる蝶々かな　えいじ
くつきりと翠黛現るる五月かな　うつぎ
新樹光シャワーとなりし並木路　澄　子

二〇二五年五月一日

瀬の楽に道近づきぬ著莪の花　うつぎ
石舞台へと高きより新樹光　明日香
連翹の垂れてひかりの疏水かな　もとこ
甘き香をまとひ潜るや薔薇の門　やよい
緑さす寺の筋塀続く道　む　べ

二〇二五年四月三〇日

千年を生きて盛んや藤の花　みきえ
発芽率百パーセント草を引く　うつぎ
居留地を綴る若葉の並木道　わかば
山山に帷のごとく懸かり藤　もとこ
咲き満ちて茉莉花邸となりにけり　む　べ

二〇二五年四月二九日

新緑の山むくむくと動きけり　みきお
囀や街の真中の屋敷林　む　べ
蒲公英の絮そよ風に旅立ちぬ　澄　子
露天風呂雨の風情に春惜しむ　愛　正

二〇二五年四月二八日

車椅子寄せて花菜に包まるる　やよい
窓カーテン代へんと見れば鳥雲に　たか子
強面となる監督やサングラス　せいじ
新緑のシャワーを抜けて出勤す　康　子
山裾の新緑縫ひて電車行く　もとこ
天空の風におしやべり樟若葉　ぽんこ
行春の山野草園去り難く　うつぎ

二〇二五年四月二七日

母直伝伽羅蕗やつと我が味に　もとこ
万緑を砦としたる旧家かな　康　子
到来のぬくもり残る茹で筍　よし女

二〇二五年四月二六日

春夕焼絆の鐘を打つ二人　なつき
山里の道標なる桐の花　ほたる

毎日句会みのる選・二〇二五年五月四日